
コーヒーはいかがですか？

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーヒーはいかがですか？

【コード】

N6280P

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

元気だった妻が脳梗塞になった。

師走と言うのに正月の買い物をするわけでもなく、今日も一日妻の介護に明け暮れる。

定年になつたら嘱託で働く決めていたのに、妻の介護をするためにきつぱりと会社を辞めた。

半年前まで、妻は元氣そのものだった。これといった病氣もなく、反抗期になつても子どもとうまくやり、家族みんなが仲良くやれたのは妻のお陰だった。明るい妻に助けられてきたが、倒れたから今度は自分かと思つているのに、妻は言葉が不自由になり、排せつもままならない体になると、私の気持ちは荒んでいきそうだった。

言葉を発することがなくなると、会話と言うものが成り立たず、自分ばかりが叱責をするだけとなつて行く。やれこぼしたとか、汚いとか、臭いとか。あれほど綺麗好きだった妻に対して、このような言葉を投げかけるなんてひどい夫だと、自分で自分が嫌だった。

二人で映画を楽しんだり、お酒を飲みに行ったりすることも消えた。酔つた妻が体を寄せてくると、思わず手を握つて歩いて帰る、そんなことも全てなくなつた。

都会で世帯を持つている子どもたちは、正月の三が日をそれぞれの連れの実家で過ごすらしい。その前に大晦日だけ帰つて来ると言う。

「おい、母さん。あの子たちももうそんなには帰つてこないなあ。お前が元氣だったからご馳走も食べれたし、楽しい話題も尽きなかったというのかねえ」

「うー」

妻は半開きになつた口元を動かしながら、何か言いたげだった。こんなに重度の脳梗塞になるなんて神も仏もないのだとつくづく思った。

ヘルパーの坂村さんがやって来た。

「こんにちわ」

「こんにちわ。どうもお世話になります」

坂村さんは三〇代の女性だった。この仕事を初めて五年と言うからもうベテランだ。嫌な顔一つせず、妻のおむつやお風呂に入れることも手伝ってくれる。妻も慣れてきたらしく、初めは声を上げていたが、優しい彼女にだんだん心を開いていくようだった。

「ご主人は丁寧に奥様を見てあげてますね。床ずれもできてないし、いつもお部屋も綺麗」

「いやあ、そうでしょうか。寝返りだけは何回もしているのですが、最近腰が痛くて」

「そうですか、私も腰痛のコルセットをしているんですが、こういうものをお使いになったらいかがですか」

「ああ、そんなものがあるのですか、買わないといけませんね」

久しぶりの会話は嬉しくて、気持ちが高揚して行く。お風呂に入れた妻は疲れたのか、トロトロ眠っているようだ。坂村さんは文字盤を持ってきていた。

「これ使ってみませんか」

「なんですか？」

「この前、奥様の指が少し動くような気がしたので、この文字盤に触れないかと思って」

「筋力の衰えた人の中には目だけでも、これを見ている字を確かめて会話ができるようになります」

「話ができるんですか」

「少しやってみませんか」

私は妻と話ができるのか、あの声は聞けなくても、いいいたいことが分かるのか。文字盤を妻の前に置くと、しばらくじっと見て、指を動かそうとする。坂村さんは指の動く範囲が狭いと分かると、もう一つ小さいものを取り出した。

妻に何か食べたいものはと聞いてみる。

すると、妻の指先が静かにゆっくりと『こ』『ー』『ひ』『ー』

と触った。

「コーヒーか。そうかそうか飲みたいか」

私は声が震えていた。涙があふれていた。坂村さんもよかったよかったですと私の背中を撫でてくれた。

初めはコーヒーをいつもの水差しに入れようとしたが、コーヒーカップに入れてみた。スプーンで口に運ぶと、うつすらと表情が出るような気がした。いつもの半開きの口が何だか閉じようとしているのが分かる。

「美味しいかい」

指先は『は』『い』『い』と答える。

坂村さんが帰ると、私は思わず妻にこう話した。

「奥さん、私を愛してますか」

すると、妻は『い』『い』『い』『え』と答える。そう昔から天邪鬼の妻は愛しているかという問いには必ずいいえと答えたものだった。笑いながら久しぶりに抱きしめた。忘れていた妻の匂い。思わず泣けてきた。声押し殺して泣いて、そして額にキスをした。

あれから一カ月、日常生活が豊かになるとはこういうことか。妻の指はほんの少しだけ滑らかに動くようになった。

妻の顔を拭いて、白粉をつける。紅をさすところ言ってる。

「きれいですよ。奥様」

『あ』『り』『が』『と』『う』と答える妻。

早速、コーヒータイムに取りかかる。

「奥様、コーヒーはいかがですか」

窓の外は初雪が降っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6280p/>

コーヒーはいかがですか？

2011年1月4日02時40分発行